

今週のメニュー

■トピックス

◇老朽管が新しい塩ビ管路に生まれ変わる ー建築・建材展 2016にてー

■随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(15)

木下 清隆

■編集後記

■トピックス

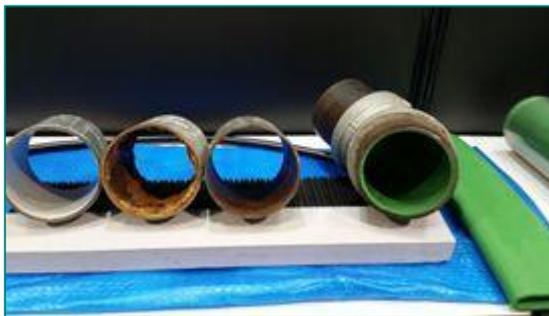
◇老朽管が新しい塩ビ管路に生まれ変わる ー建築・建材展 2016にてー

老朽化した下水道管を改築及び修繕する際に地面を掘り起こすことが困難なケースでは、開削工事が不要で工事が短縮できる管更生工法の採用が増えてきています。

その工法には、機械的強度、化学的安定性、耐薬品性、耐久性等に特長のある硬質塩化ビニル樹脂を使用したものが知られています。その工法は管路の口径で大別され、SPR工法及びダンビー工法は大口径（900mm以上）の更生に、またオメガライナー工法及びEX工法は中小口径（150～400mm）の更生に用いられています。

（参照 [PVC News No.72](#)）

一方、マンション等の屋内においては小口径（150mm以下）の配管に適応できる、塩ビ樹脂を使用した管更生工法が提案されています。そのひとつが「リノベライナー工法」で、2016年3月8日から11日まで東京ビッグサイトで開催された「建築・建材展 2016」において、いずみテクノス株式会社が展示していましたので紹介します。

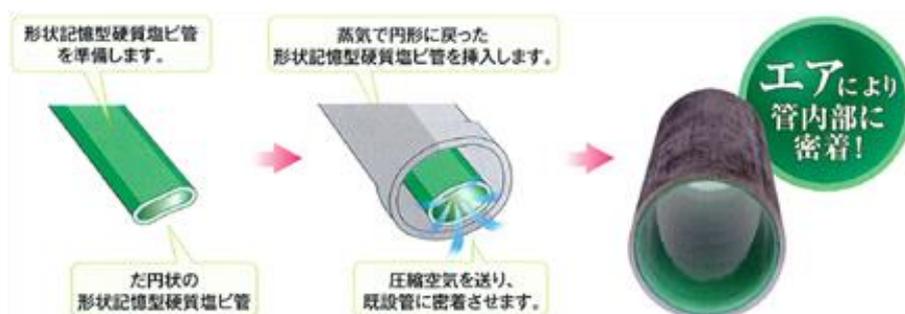


老朽管と更生管

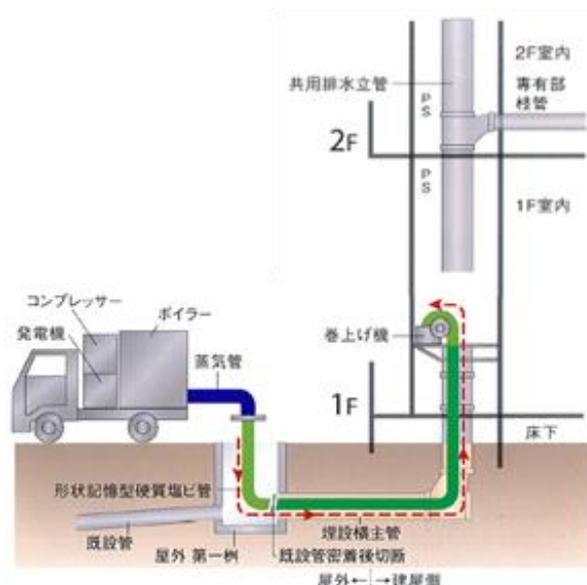


更生管の施工モデル

この工法は、硬質塩ビ管を楕円形状に折りたたんで、加熱しながら排水横主管に挿入し、蒸気で円形復元させ、圧縮空気で管内側に密着させます。



築 30 年以上の高経歴マンションの排水管部分は特に損傷が激しいことが多く、管路に穴が開いているケースにも適しています。この更生管は、45 度、90 度の曲間部もシワがなく、塩化ビニル樹脂の平滑性が高いため流下性能の低下はなく、穴の空いた管路も更生可能で、開削工事が不要なため工期が大幅に短縮され、排水管を取り替える更新工事より経済的なことが特長です。



全国に分譲マンションストック戸数は 2013 年末で約 600 万戸（国土交通省 HP より）に達しています。そのうち築 30 年以上の経年マンションは約 150 万戸となっており、今後もその数は増大することが見込まれています。それに伴い工事対象件数は今後も増大が見込まれ、管更生工法が排水管の維持管理に貢献していくことを期待しています。

## ■ 随想

### ◇古代ヤマトの遠景〔番外〕（15）

木下 清隆

<前回とのつながり>

櫛田神社の祭神捜しは、結構困難な作業である。現在知られている大若子命の前に、櫛玉命が祀られていた、という深層に行き当たったからである。この櫛玉命は、今後、歴史の表舞台に徐々にその姿を現してくるが、それまではしばらくご辛抱願いたい。前回までは、伊勢の櫛田神社が舞台であったが、今回は肥前（佐賀県）にも、ちょっと立ち寄る。なお、ここに出て来る肥前神崎は、吉野ヶ里遺跡で有名な地である。

#### 【白井宗因の説】

橋村正身によって、櫛田神社の祭神は大若子命であると結論された経緯を以上に説明してきたが、これの基本史料となったのは『倭姫命世記』であった。ところが同じ世記を用いて正身より百年も前に、大若子説を唱えた人物がいた。その名を白井宗因という。出口延経、橋村正身等の神道家或は国学者達の所説を本流の説とするなら、本業が医者宗因の説は傍流の説といえよう。彼は寛文七年（一六六七）の著書『神社啓蒙』（大日本風教叢書、第八輯）の中で、櫛田神社について次のように述べている。

#### ○櫛田神社

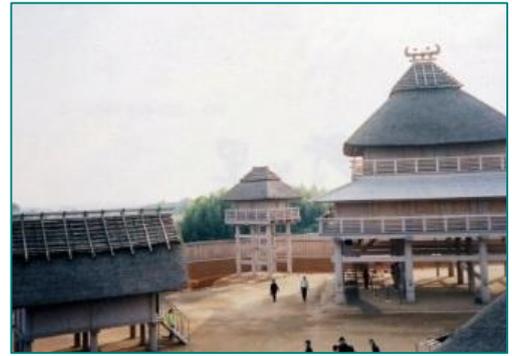
肥前国神埼郡に在り。祭るところの神一座。

大若子命（天御中主十九世の孫）

垂仁天皇の御宇、北狄退治の功あり、大幡主命と賜わる。（伊勢巻に註す）

ここで注意が必要なのは、対象が神埼の櫛田神社であって、伊勢の櫛田神社ではないことである。この著書は伊勢神宮から説き起こした本格的な神社考であり、林羅山の『本朝神社考』（正保二年頃完成、一六四五）と共に併せ観るべき我国神社沿革史の白眉なり、と称されるほどのものである。それなのになぜ、伊勢の櫛田神社ではなくて神埼なのかが疑問であるが、これについては当時、伊勢の櫛田神社は存在していなかったからとしか考えられない。先にも説明したようにこの当時は、櫛田大社に合祀されていたからである。

では、なぜ博多の櫛田神社ではなくて、神埼なのかである。それは江戸初期の頃は、未だ神埼の櫛田神社のほうが、名声が高かったからだと考えられる。浪華の地に居た宗因からは、神埼の櫛田神社のほうが大きく見えたということである。ここで注目されることは、彼にとって伊勢の櫛田神社が嘗て存在していたことは当然、知っていたはずであるが、各地の櫛田神社の祭神は皆同一であり、それは大若子命であると考えていたということである。



吉野ヶ里遺跡（復元集落）

神埼の櫛田神社の祭神は後で触れるが、当初から女神であったと地元では言い伝えられており、彼は全く現地の状況も実情も調査もせずに文献から、具体的には『倭姫命世記』から、大若子命を導き出し、櫛田神社の祭神は大若子命であるとしたことになる。なぜ大若子命なのかについては、彼は何もその論考過程を示していないが、恐らく本考で検討したようなプロセスを辿ったものと思われる。ここで問題になるのは、同じ『倭姫命世記』を用いていながら、なぜ橋村正身と百年もの差が出たのかということである。



吉野ヶ里遺跡  
（復元建物：物見櫓）

江戸時代、世記が世に出た時期については、田中卓氏の「解題 倭姫命世記」『神道大系論説編五』（一九九三）によれば、関係資料の詳細な調査によって寛文元年（一六六一）頃であることが明らかにされている。ところが、先にも述べたように白井宗因の著書『神社啓蒙』が世に出されたのが寛文七年（一六六七）だから、彼は『倭姫命世記』を見ているはずだとしても、おかしくないことになる。出口延佳が世記を書写したのは寛文九年（一六六九）のことであるが、その次男である出口延経が『神名帳考証』を完成させたのは享保十八年（一七三三）のことである。

なぜ、延経が大若子命説を採らなかったのかについては先に検討したが、本流の学者は慎重であったとするのが、一つの結論かもしれない。これに対し、白井宗因の場合は傍流の気安さから、一気に本筋に切り込めたのかもしれない。然しながら彼の、時代に先駆けした卓見を、当時、識る者はいなかったようである。あるいは傍流の説として無視されたのかもしれない。櫛田神社由緒書の著者が宗因に付いて触れていないのは、このような事情からであろう。

以上までに検討した櫛田神社の祭神、櫛玉命説をまとめると次のようになる。

- 櫛玉命説は、江戸時代の伊勢神宮の神官出口延経或いは国学者等まで、かなり広範囲に伝承されていたようであるが、その根拠を史料的に彼等は明らかにすることが出来なかった。当時の唯一の史料である『倭姫命世記』で説明しようとしたが、世記は基本的に大若子命の宣伝書であったことから、この中にその根拠を求めること自体に無理があった。このような状況の中で、橋村正身は櫛玉命説を否定し『倭姫命世記』の中から、大若子命を櫛田神社の祭神として導き出し、これを主張した。当然、これを覆すような史料は無く、結果的に大若子命説が定着した。

先の検討結果と併せて考えると、持統朝になって大若子命が櫛田神社で祭祀されるようになったが、それ以前は、櫛田神社では櫛玉命が祭祀されていた可能性が高く、そのことが、長い間特定の階層に伝承されていたといえる。しかし、なぜ、櫛玉命が祭祀されていたのか、その理由は判らない。 —



神崎櫛田神社

これで櫛田神社由緒書の検討を終わることにするが、最後にこの由緒書は、いつ、誰によって書かれたのかについて少し触れておきたい。この問題に就いて、筑紫豊氏は明確なことは何も述べていないが、由緒書について、氏が（伊勢の大西源一氏に依頼されたもの）と注記していることから、これは昭和になって櫛田神社が再興されたときに、神社側から大西源一氏に制作依頼されたものではないかと考えられる。この中に、櫛田神社が明治四十一年郷社神山神社に合祀されたことが記されており、これ以降であることは間違いないからである。

このような事情から由緒書が伊勢の大西源一氏によって書かれたものとするなら、氏は、集めることの出来た多くの資料とともに、その当時、伊勢の関係者の間で語り継がれていた伝承等も一緒にして、この由緒書をまとめたと推測することはできよう。大西源一氏は著作も多い地元の著名な郷土史家であり、大正四年以降、神宮司庁に奉職していた人物である。櫛田神社の誕生から今日までの盛衰は、概ね、氏がまとめた内容で間違いないのではなかろうか。大若子命の存在をこの歴史の流れの中で、違和感無く解釈出来るからである。

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)  
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

## ■ 編集後記

始業式も終わり、今週から子供たちは本格的に学校に行き始めました。毎年4月から様々なことが変わる中で、我が家の最近のテーマは電力自由化。ダイレクトメールや電話などみんな言うことが「自由化で安くなります！」調べてみるとオール電化住宅など深夜電力で多くの電力を使ってエコキュートを使ってお湯を沸かしている家などは安くないことが分かりました。最近をよく調べないとわからないことが多いなと思いました。(リマル)

## ■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)、[メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 高橋 満

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL [info@vec.gr.jp](mailto:info@vec.gr.jp)

